



星に願いを

林真理子

著者 | 林真理子 1954年4月、山梨県生まれ。日本大学芸術学部卒。1981年にTCC新人賞を受賞して売れっ子コピーライターとなる。一方、「ルンルンを買っておうちへ帰ろう」で出版界にデビュー、1986年には「最終便に間に合えば」他で直木賞を受賞。おもな著者に「ルンルン症候群」「花より結婚きびダンゴ」などのエッセイ、「星影のステラ」「テネシーワルツ」などの小説がある。

星に願いを

林真理子

© Mariko Hayashi 1986



講談社文庫
定価340円

昭和61年9月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183836-9 (0)



講談社文庫

星に願いを

林真理子

目次

第一章	キリコ、記者会見をする	七
第二章	キリコ、マスコミを望む	一三
第三章	キリコ、電話番をしながら男女のキビを知る	四三
第四章	キリコ、ひたすら労働す	六四
第五章	キリコ、コピーライターとやらをめざす	八九
第六章	キリコ、修業時代に入る	一〇九

第七章 キリコ、世間を知る、男を知る

二二五

第八章 キリコ、職と恋を失う

二五二

第九章 キリコ、転落がはじまる

二七三

第十章 キリコ、男に狂う

二九二

第十一章 キリコ、野心をもつ

三二五

第十二章 キリコ、街をひとりで歩く

三三五

あとがき

三五二

解説

山田詠美 二五五

星に願いを

本書は昭和59年1月小社より刊行されました。

第一章 キリコ、記者会見をする

テレビ局の廊下というのは、どうしてこうも長く、曲がりくねっているのだろうか。

将来、革命が起こった時に、暴漢たちにたやすく占拠されないためだということを、以前キリコは友人から聞いたことがある。

それほどテレビ局というものは権力の象徴なのだろうか。それならば、そのテレビ局のキャンペーン・ガールに選ばれた自分は、やはり権力のまっただ中にいるということなのだろうか。

革命とか権力という言葉は、キリコにとって遠い不可解なところにある。しかし、こうして豪華なドレスをまとい、専属の化粧師やスタイリスト、広報関係の男たち数人を従えて歩く自分が、傍目にもどれほど華やかで恵まれた存在なのかはよくわかる。

こんな場面を、遠い昔に見たことがあると、キリコは思った。確か「シンデレラ」の絵本のページだっけ。さんざん皆からいじめられ、みじめな日々をおくった娘が、ある日突然きらびや

かな王冠をさすけられ、城へ迎えらるのだ。

そういえば、昨日のスポーツ新聞にも書いてあった。

「まさに現代のシンデレラ。ついにCMモデルにも」

本当にそうなのだろうか。

けれども今のこの場面は、少女の頃ほんやりと眺めた絵本の一ページにしては、あまりにもくつきりとキリコの中にある。それに「シンデレラ」という比喩は、あまりにも陳腐で平凡で、キリコは好きになれなかった。

先頭の男が、つきあたりのドアを開けた。

ズラッと並んだ記者がいる。カメラのフラッシュがたかれる。そしてそれに全く臆することなく、ニッコリと微笑みかけた自分にキリコは驚いていた。

「だって、いつも復習していたんだもん」

そうなのだ。キリコはやつと気づいた。この光景は、彼女がずっと長いこと夢み、想像し、反すうしていたものとそっくり同じだったのだ。

「じゃ、こういうことを夢がかなったって言うんだわ」

それにしては、どうしてこう冷静でいられるのだろうか。キリコが考えていたサクセス・ストーリーのクライマックスはこうなのだ。昔の苦労や努力を思い、主人公は一筋の涙を流すことになっている。ハンカチをギュッと握りしめ、しばらく無言で勝利の喜びに酔うことになっている。

ところが今のキリコときたら、好奇心をまるだしにして前に並ぶ男たちを眺めているのだ。それは彼女が初めて目にする、多量の芸能記者たちであった。それまでにキリコは実に多くのインタビューを受けていたのであるが、そういう女性誌や総合誌の編集者たちとこの男たちとはあきらかに違っているようにキリコは思える。

「こういう人たちが芸能人を追っかけて、いろんなスキャンダルを書いたりするんだわ」

しかし、自分もその矢面に立たされ、彼らたちから何かされるのではないかという予感はない、なともいえないスリルを彼女にもたらしただけだ。

キリコは再び、彼らに向かって微笑んだ。

テレビ局の広報部長の挨拶が続いている。

「と、そんなわけで、私どもの秋のキャンペーンでございますが、今回は初めて芸能人以外の方を選ばせていただきました。コピーライター、エッセイストとして大活躍なさっている森山キリコさんです」

記者たちは、いっせいにペンをもってメモをとりはじめた。その姿も、たまたまキリコには滑稽であった。

「どうして」

キリコは彼らを見わたしながらつぶやいていた。

「どうして、私のことなんか記事にするの。私のことが本当におもしろいの」

キリコは突然笑い出したくなった。自分がまるでアイドル・タレントのようにこの席に座り、

記者たちがそれを不思議とも感じず、自分を見つめていることのおかしさのためであった。

キリコは、すんでのところでのび笑いをするとこだった。しかし、すぐにこの事実をもつと厳肅に、謙虚にうけとらなければいけないと、彼女は秘かに反省して身をただした。

「本当に頑張ったと思うわ、私。三年前、ううん、半年前だって、こんなふうになろうとは誰も思っていなかったもんね。うん、私っていろいろと苦労したもの」

しかし、その時ほど「苦労」という言葉がそらぞらしく聞こえたことはなかった。

「苦労って、じゃ私はどんなことをしたんだっけ」

キリコは自分の過去に思いをめぐらした。就職できなかったこと、貧乏だったこと、人々の輪の中にうけ入れてもらえなかったこと……。

それは苦労とよぶには、あまりにもささやかな体験だった。昭和四十年代に学校を卒業し、青春時代をすごした人間なら、誰でもこんな出来ごとをひとつやふたつ体験している。それに、苦労などという重々しい単語を使うには、キリコはまだ二十九年間しか生きていないのだ。

「森山さんに質問したいんですけどねえ」

前の席に座っていた若い男が、突然キリコに声をかけた。痩せぎすの顔には、いかにも皮肉っぽい表情がうかんでいる。

「このキャンペーンの話があった時、さぞびっくりしたでしょう」

「いいえ」

その男が、というより、その場に居合わせた人々が、どんな答えを要求していたかキリコには

十分わかっていた。それなのにキリコの声は、キリコを裏切つてきつぱりと言いはなっていた。

「私、ぜんぜん驚きませんでした」

「ほうー」という声があちこちでもれた。それはあきららかに、その答えをキリコの傲慢さ（ごうまん）ととり、かすかな非難を込めたため息であつた。

「この二、三カ月の自分の変化を思うと、今の私つて、どんなことがあつても驚かないようになってしまつたんです」

男たちは再びベンを走らせはじめた。

彼らにどうやったら今の気持ちを説明できるのだろうか。いろいろなことが、すべていつべんに起こつたのだ。このあいだまで、ごく平凡に生きてきた若い女が、ある偶然から一冊の本を出した。その本がベストセラーになり、彼女が「マスコミの寵児（ちやうじ）」といわれるようになるまでのあまりの早さ。そのとまどい、それをどうやって彼らに話したらいいのだろうか。

いや、それがわからない彼らではない。ひとりの無名の人間が突然脚光を浴び、雪ダルマ式にメディアの中でふくらんでいく図式など、この男たちはさんざん見聞きしているはずだ。キリコのこの二カ月の体験も、彼らにしてみればごくありふれた話のひとつに違いない。

しかし、彼らをとまどわせているものがいくつもあった。

キリコは「世に出てくる女」の条件を、ほとんど備えていないのである。

小太りのからだに、大きすぎる目鼻立ちは、あきらかに美貌（びびよう）というにはほど遠いものだ。物を書く人間としての才智にあふれているかと思えばそうでもない。好奇心をまる出しにした表情は

あまりにも素朴すぎる。

「本当にふつうの女じゃないか」

キリコは最初に質問した男がつぶやくのを聞いたような気がする。

第二章 キリコ、マスコミを望む

自分がそういう女でないことに気づいたのは、いったいいつ頃からだろうかと、キリコは考える。

そんなに深く思い出さずともわかっている。大学を卒業した二十一歳の春に、彼女は自分が女としてどのへんのランクにいるかを、はっきり通告されたのだ。

もちろん、その年齢になるまでなにもわからなかったわけではない。しかし、学生という枠の中で、見なかったら見ずにすむものはいくらでもある。そしてキリコは、持ち前の動物的勘^{かん}で、今思えば実に多くのものを避けて暮らしてきたような気がする。

ディスコにも、ダンス・パーティーにも一度も行ったことがなかった。

特にどこかの大学が主催する「ダン・パ」は、キリコにとって恐怖さえ感じさせるものだった。男が女を選ぶという事実。そして誰からも声をかけてもらえず席に居残る女がいるという事実。人はどうしてそんな場に居合わせることができるのだろうか、キリコは不思議でたまらない。それよりも、ひとり下宿で本を読んでいた方がいいと心から思うのだ。

本といっても、たいしたものを読んでいるわけではない。アパートから歩いて五分ほどのところに、老婆が一人でやっている貸本屋があった。一回五十円を出すと、新刊の単行本でもマンガでもなんでも貸してくれる。畳の上にねそべりながら、それを読みあさっていると、それでキリ

コの一日はあっけなく暮れるのだ。

本にはいつもたくさんのが書いてある。男と女は、出会えたいてい恋をしたし、恋をすればすぐ寝ることになっている。キリコはかなりきわどい本も借りていたので、「寝る」シーンはんざりするぐらい目に入ったものだ。

時々キリコと同じように男を知らない女がヒロインになる時がある。そしてその女たちは、納得ずくだったり、犯されたりしてそれを知っていくのであるが、その後の彼女たちの変化は、キリコにはかなり興味深いものであった。

「なにか人生がひっくりかえるようなスゴイことが起こるらしい」

キリコは二つ折りにした座ぶとんから頭を起こした。その座ぶとんは夜も枕がわりに使っている、ちょうど頭のかたちに薄い汚れがついている。ほんのわずかの時間ではあるが、キリコは自分のだらしなさを恥じた。

「こんな女にも、本当にそんなことが起こるのかしら」

どうしても信じられない。

とにかくキリコのそれまでの人生に、「男性」が登場したことなど一度もないのだから。

地方の女子高校から、東京の二流の女子大にキリコは進んだ。文字どおり、女の中だけの青春である。高校に進学する時も、もう少し頑張れば共学の受験校に行けるのにと、よく教師から言われたものであるが、それよりも安逸の方をキリコは選んだ。

それは彼女の小さなあきらめだった。

たとえば、男の子たちと一緒に三年間をすごしたとしても、それでいたいどんなことが起こるというのだ。他の女の子たちのように、手紙をもらったり、幼ない愛をささやかれたりすることはまずないことを、キリコはたやすく想像できた。そのために悲しんだり、嫉妬する自分も彼女には見える。

その頃のキリコが最も忌み嫌ったのは、自分の感情が他の人々によって、支配されたり、傷つけられたりするのではないかという不安をもつことだったのだ。

行動を起こさなければ、なにことも起きないのだ。人にいたふられることもないし、泣くこともないのだ――。

もちろん、こんな考えを、十五歳やそこらの女の子がはっきりもっていたとは思えない。これは後に大人になったキリコが、少女時代の自分をふりかえってつくった、多分にこじつけがましい結論であろう。なぜなら、どんなにささやかでも、自分の生き方に対して指針めいたものをもっている人間は、思慮深く、そしてたいがいが寡黙である。ところが、キリコときたら、その頃からむやみにほがらかでよく笑う少女だったのだ。というよりも、その明るさは愚鈍に近いものだと人々に思われていたのである。

キリコは、中学校を卒業する間際まで、冷蔵庫の中はいつも明るいものだと思込んでいた。そんな少女だったのである。

列車に一人で乗れるようになったのは、高校二年生の時である。

夏休みに、近くの予備校に行くために、キリコは初めて列車通学をした。その第一日目、キリ